

## 『第二コリント書』 1章21～22節の釈義的研究

## An Exegetic Study of 2 Corinthians 1:21-22

中 里 郁 子

NAKAZATO Ikuko

## 1. はじめに

コリントの教会において聖パウロは、コリント訪問の旅行の予定を変更したことによってコリントの信徒達から使徒としての真正性を疑問視され、聖パウロを優柔不断であるとして彼の誠実さを疑う信徒に対して、彼の言葉と行動の誠実さを弁護する必要に迫られていた。

『第二コリント書』 1章15節～17節では、聖パウロは彼のコリント訪問の旅行の計画についてのテーマを扱っており、1章23節から2章4節では再び旅行の計画の変更について述べているのに対し、その間の1章18節～22節は具体的な旅行の計画の話題を中断して、主に神の真実についての神学的な考察が行われている。特に、1章21～22節において聖パウロは「キリスト」、「神」、「聖霊」について言及しつつ、三位一体的神理解を表現している。本稿では、『第二コリント書』 1章21節～22節がどのような神学的意義を持つのか、また、この書簡において聖パウロがどのような意図から旅行予定の変更という話題の途中にこの神学的考察を挿入したのかを明らかにしてゆきたい。

その際、解釈手続きとしては、以下のように行う。まず、本文批判を行って原典を確定し、次に、統語論的構造の分析、そして、歴史的批判的方法を用いつつ、表現面からの意味の分析を行う。さらに、上記の分析に基づいて神学的思想の抽出を行って神学的意義を考察する。最後にまとめという順序である。

2. 本文批判<sup>1)</sup>

『第二コリント書』 1章21～22節

<sup>21</sup> ὁ δὲ βεβαιῶν ἡμᾶς σὺν ὑμῖν εἰς Χριστὸν καὶ χάρις ἡμᾶς θεός,

<sup>22</sup> ὁ καὶ σφραγισάμενος ἡμᾶς καὶ δοὺς τὸν ἀρραβῶνα τοῦ πνεύματος ἐν ταῖς καρδίαις ἡμῶν.

21節の βεβαιῶν に続く人称代名詞は、C 104 630 *pc sy<sup>h</sup>* においては、υμας συν ημιν と倒置し

<sup>1)</sup> 本文批判は、次のギリシャ語本文を基礎に行う。NESTLE, E. and ALAND, K. & B. (ed.), *Novum Testamentum Graece*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 8th print of 27th ed., 1st 1898, 2001.

ている。しかし、 $\eta\mu\alpha\varsigma$   $\sigma\upsilon\nu$   $\upsilon\mu\iota\nu$ の方がより強い支持を得ている。

22節の冠詞  $\omicron$  は、 $\aleph^* A C^* K P \Psi 33 81 365 630 1881^{*vid} 2464$ 等においては省略されている。おそらく、一つの冠詞が4つの分詞を修飾する文体を造るために冠詞を省略したと考えられる。 $P^{46} \aleph^2 B C^3 D (F G \text{ は } \kappa\alpha\iota \omicron \text{ の語順}) 0243 0285 1739 1881^c v g^{cl}$  *Majority text* Ambst は冠詞を置いており、冠詞を置く方が省略した場合よりも一層難しい読み方であるため、原典には冠詞を置いていたと見做しうる。

### 3. 釈義

#### (1) 構造分析

『第二コリント書』1章21節から22節は一つの名詞文を構成している。名詞  $\theta\epsilon\acute{o}\varsigma$  が文章全体の唯一の述語であり、動詞  $\epsilon\acute{\sigma}\tau\iota\nu$  が省略されている。四つの分詞  $\beta\epsilon\beta\alpha\iota\omega\nu$ 、 $\chi\rho\iota\sigma\tau\acute{\alpha}\varsigma$ 、 $\sigma\phi\rho\alpha\gamma\iota\sigma\acute{\alpha}\mu\epsilon\nu\omicron\varsigma$ 、 $\delta\omicron\upsilon\varsigma$  が  $\theta\epsilon\acute{o}\varsigma$  の行為を表しているが、 $\beta\epsilon\beta\alpha\iota\omega\nu$  は現在分詞であり、継続的行為を表すのに対して、他の三つの分詞はアオリスト時称であり、限定的時点に行われた行為であることを表す。このような時称の違いは、 $\beta\epsilon\beta\alpha\iota\omega\nu$  は他のアオリスト時称の三分詞の  $\chi\rho\iota\sigma\tau\acute{\alpha}\varsigma$ 、 $\sigma\phi\rho\alpha\gamma\iota\sigma\acute{\alpha}\mu\epsilon\nu\omicron\varsigma$ 、 $\delta\omicron\upsilon\varsigma$  の動作に依存してその効果が継続していることを示唆する。 $\beta\epsilon\beta\alpha\iota\omega\nu$  と  $\chi\rho\iota\sigma\tau\acute{\alpha}\varsigma$  とが文頭の冠詞を共有して接続詞によって連結されており、 $\sigma\phi\rho\alpha\gamma\iota\sigma\acute{\alpha}\mu\epsilon\nu\omicron\varsigma$  と  $\delta\omicron\upsilon\varsigma$  は  $\theta\epsilon\acute{o}\varsigma$  の後の冠詞を共有して三番目の接続詞によって連結されている。従って、始めの二つの分詞は時称の違いにも関わらず、唯一の冠詞を用いることによって強く結びつけられており、後半の二つの分詞も同様に一組に結ばれている (cf. FURNISH, 1984, p. 149)。

統語論的構造は次のように、 $\theta\epsilon\acute{o}\varsigma$  を中心とする ABA' という構造をなし、A と A' にはそれぞれ  $\chi\rho\iota\sigma\tau\acute{o}\nu$  と  $\pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha\tau\omicron\varsigma$  がパラレルに置かれている。人称代名詞  $\eta\mu\acute{\alpha}\varsigma$  あるいは  $\eta\mu\omega\nu$  が A と A' それぞれに2つ置かれ、各分詞の直接目的語あるいは間接目的語の修飾語となっている。

A	$\acute{o}$ $\delta\grave{\epsilon}$ $\beta\epsilon\beta\alpha\iota\omega\nu$	$\eta\mu\acute{\alpha}\varsigma$ $\sigma\upsilon\nu$ $\upsilon\mu\iota\nu$	$\epsilon\iota\varsigma$ $\chi\rho\iota\sigma\tau\acute{o}\nu$
	$\kappa\alpha\iota$ $\chi\rho\iota\sigma\tau\acute{\alpha}\varsigma$	$\eta\mu\acute{\alpha}\varsigma$	
B			$\theta\epsilon\acute{o}\varsigma$ ,
A'	$\acute{o}$ $\kappa\alpha\iota$ $\sigma\phi\rho\alpha\gamma\iota\sigma\acute{\alpha}\mu\epsilon\nu\omicron\varsigma$	$\eta\mu\acute{\alpha}\varsigma$	
	$\kappa\alpha\iota$ $\delta\omicron\upsilon\varsigma$ $\tau\omicron\nu$ $\alpha\rho\rho\alpha\beta\omega\nu\alpha$ $\tau\omicron\upsilon$		$\pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha\tau\omicron\varsigma$
	$\acute{\epsilon}\nu$ $\tau\alpha\iota\varsigma$ $\kappa\alpha\rho\delta\acute{\iota}\alpha\iota\varsigma$	$\eta\mu\omega\nu$	

以上のように統語論的文構造を考察した1章21節から22節において用いられている語は隠喩的であるので、次にそれぞれの語がどのような意味を持つのかを吟味し、聖パウロの神学的理解を洞察してゆきたい。

## (2) 表現面の分析

### 1) 21節

ὁ δὲ βεβαιῶν ἡμᾶς σὺν ὑμῖν εἰς Χριστόν

βεβαιῶν は動詞 βεβαιῶ の現在分詞であり、神の行為が信仰者にとって継続的な経験であることは先に考察した。この語には「安定させる」「確実にする」「成就する」「確固不動のものとする」(玉川、1978、pp. 69-70) などの意味がある。同語源の形容詞 βέβαιος が『第二コリント書』1章7節において用いられ、パウロがコリントの信徒について抱いている希望の揺るぎなさを表現している。また、βεβαιῶ の同語源の名詞 βεβαίωσις は、アッティカの法律において売り手の確定した義務、すなわち「売買に関する保証」を意味する。22節の ἀρραβὼν が売買契約上の「手付金」の意味を持つため、これらの語は共通して売買に関する語彙である。売り手は第三者からの訴えがあった場合でも、「手付金」(ἀρραβὼν) を支払った買い手に対しては売買契約の成立を「保証する」(βεβαιῶ) ため、これらの二語は互いに緊密に結びついている (cf. DEISSMANN, 1901, pp. 104-109)。聖パウロはこれらの法律的保証に関する用語を用いることによって、争う余地なく確実で取り消しえない関係のイメージを、信仰者と神との関係に当てはめていると考えられる。コリントは当時の商業の中心地であったため、コリントの信徒はこの法律的、商業的な語の意味をよく知っていたであろうし、この語から神の恵みのゆるがない確かさを理解したと考えられる。

本節では動詞 βεβαιῶ が εἰς Χριστόν という句と共に用いられているため、この句と共に動詞の意味を吟味する必要がある。εἰς は「～の中へ」「～に向かって」「～を目標として」(玉川、1978、pp. 120-121) などの意味、あるいは、ἐν と同義にも用いられ得るが、Χριστόν と共に用いられており、「キリストの内に強く一致させる」という意味となり、信仰者のキリストにおける確固とした一致が示唆されている。εἰς Χριστόν はパウロ書簡においては、『ガラテヤ書』3章27節や『ローマ書』6章3節に見られるように、洗礼に関して用いられている特徴的な句である。聖パウロは『ローマ書』6章1節～14節において、洗礼とキリストの死を関連付け、キリスト者は洗礼において、罪のための犠牲であるキリストの死にあずかり、それは復活の新しい命に生きる為であることを示している。『第二コリント書』1章21節において εἰς Χριστόν という洗礼に特徴的な句を用いることによって、聖パウロは神がキリスト者をキリストと一致させ、キリストにおいて新しい命を分かち合う信仰共同体を形成することを暗示していると考えられる。

ἡμᾶς σὺν ὑμῖν は聖パウロ、彼の協働者、およびコリントの信者を指しており、使徒聖パウロとその協働者も、コリントの信者たちも同様にキリストの内に固く一致しており、キリストにおける新しい命の中に結ばれていることが強調されている。

次に βεβαιῶ が他のパウロ書簡においてどのように用いられているかを考察して、本節におけるこの動詞が用いられた意図を考察してゆきたい。『ローマ書』15章8節では、この動詞を用いて、キリストが先祖たちに対する約束を「確証するため (εἰς τὸ βεβαιῶσαι)」に「神の真

理（ἀλήθεια）を表すために割礼ある者たちに仕える者となった」ことが述べられている。神の ἀλήθεια とは神が旧約においてイスラエルの祖先に与えた多くの約束への誠実、あるいは、真実である。キリストは神の真実が受肉した存在であり、神の約束がキリストにおいて成就しているのである。『ローマ書』15章8節において、このように動詞 βεβαιώω が旧約における約束の確証について用いられ、キリストにおいて現れた神の真理（ἀλήθεια）を表すことと関連付けられている。『第二コリント書』1章20節においては、キリストにおける神の約束の成就が語られ、キリストが神の約束の「然り」であるとされ、21節においてキリストの内に信仰者を「強く一致させる（βεβαιώω）」ことが神の約束への実現であるキリストと結びつけることであり、神の約束の成就という文脈においては動詞 βεβαιώω が用いられていることが『ローマ人への手紙』15章8節と類似している点において注目に値する。

『第一コリント書』1章6節においてコリントで「確かなものとされる（ἐβεβαιώθη）」のはキリストについての証しであり、8節においては、キリスト者の終末的な姿について、最後まで主が「しっかり支えられる（βεβαιώσει）」ことが述べられている。

以上考察したように、聖パウロは動詞 βεβαιώω を神の旧約における約束の真実、信仰の証、終末的な主キリストの日にいたる主による支えという文脈で用いている。『第二コリント書』1章21節において、神の約束の成就の真実と、また、すでに洗礼によって始まっており、終末において完全に実現されるキリストとキリスト者との一致という二つの側面をこの語によって表現する意図があったといえる。

καὶ χρίσας ἡμᾶς θεός,

動詞 χρίω は七十人訳聖書においては、王職、祭司職、預言職の職務のための聖別のための塗油を表現するために用いられている語である。アロンと彼の息子たちは祭司として塗油されており<sup>2)</sup>、サウル、ダヴィデ、ソロモンは王として<sup>3)</sup>、エリシャは預言者として塗油されている<sup>4)</sup>。一般に塗油の目的は塗油される者に権限、能力、威厳を与えることである。旧約における神による塗油は霊の授与と密接に結びついていた。新約聖書では本節以外においては動詞 χρίω は常にキリストが塗油されることを意味するために用いられている<sup>5)</sup>。ルカは洗礼時のイエスを、『イザヤ書』において言及されている塗油された「主の僕」の人物像と同定している<sup>6)</sup>。イエスの洗礼において彼を神の子を宣言する声と共に聖霊が降っていることから、イエスは洗礼において塗油されたと考えることができる。また、ルカは、イエスのミSSIONの預言者としての機能を「ἔχρισέν με εὐαγγελίσασθαι」（『ルカ』4章18節）という語句によって述べ、イエスを、神の民の救いを実現するために言葉と行いの両方において力強い、聖霊によって塗油さ

<sup>2)</sup> 『出エジプト記』29章7節、30章30節、『レビ記』8章12節参照。

<sup>3)</sup> 『サムエル記上』10章1節、15章1節、16章13節、『列王記上』1章39節参照。

<sup>4)</sup> 『列王記上』19章16節参照。

<sup>5)</sup> 『ルカ』4章18節、『使徒言行録』4章27節、10章38節、『ヘブライ書』1章9節参照。

<sup>6)</sup> 『ルカ』3章22節、『イザヤ書』11章1～3節、42章1～4節参照。

れた預言者として示している (cf. WENK, 2000, p. 211)。これまでのイエスの塗油に関する節から、塗油の二つの側面が考察された。つまり、一つは、イエスが聖霊の授与に関連する塗油の行為を受けたこと、次に、イエスは「油注がれた者 (ὁ Χριστός)」すなわちメシアとして彼の任務のために権限を与えられたことである。パウロが『ルカ』と『使徒言行録』に見受けられるように、聖霊の授与と塗油を結びつける伝承を考慮していたとすると、χρίσας は神によるミッションのための聖霊の授与による塗油ということを意味するものと考えられる。

21節の二つ目の ἡμᾶς が誰を指しているかを考察しなければならない。21節前半では、ἡμᾶς σὺν ὑμῖν とコリントの信徒を ὑμῖν と明らかに示しており、使徒聖パウロおよび彼と協働している宣教者を指す ἡμᾶς とは区別されている。二つ目の ἡμᾶς も一つ目同様にコリントの信徒を含めず、使徒聖パウロおよび彼の協働者とする方が自然である。

χρίω と同語源の名詞 χρίσμα は『ヨハネの第一の手紙』 1章20節および2章27節において3回用いられ、「聖なる方」による信仰者への塗油が、「真理を知ること」と結びつけられている。

『第二コリント書』 1章21節においては、Χριστόν と χρίσας が言葉遊びを意図して用いられていると考えることができる。キリストとはつまり「油注がれた者」であり、キリストが聖霊によって塗油されたのと同じように、神の塗油する行為 (χρίσας) によって使徒パウロは「油注がれた者」であるキリストと結び付けられたことが表現されている。χρίσας という言葉には、「キリストとする」というような Χριστόν との語呂合わせがあり、聖パウロはこの語を用いることによって、神がイエスに塗油しメシアの権能を与えたのと同じようにパウロに使徒としての権能を与えたことを暗示している。キリストが信頼できる存在であるのと同じように、パウロもまったく信頼し得るようになる恵みを与えられ、いわば、「もう一人のキリスト」(MURPHY-O' CONNOR, 1991, p. 24) とされることが示されている。

旧約聖書における動詞 χρίω の用法を上記に考察したように、χρίω は神から与えられた王職、祭司職、預言職などの特別の職務のための権限を与える聖別のための塗油としての意味を持ち、新約聖書においてはイエスの預言者の使命、またメシア的王としての塗油を意味することから、ここでは、使徒に与えられた特別の職務のための聖別のための塗油と言える。

以上に考察したように、18節から20節では、キリストが神の約束の「然り」であり、神の約束の成就の受肉であることが示され、21節の前半で神の真理であるキリストの内にパウロおよび他の信仰者が一致していることが示されたことと、後半で聖霊の塗油により、パウロがキリストのように信頼し得る使徒としての使命を果たすように力を与えられ、真理を説教する者としての資格を神から与えられ、信頼されるに値する者であることが主張されている。このように、キリストとの一致を示すこと、また、キリスト同様に使徒としての聖霊による塗油を受けていることを示しつつ、パウロは自身の使徒としての正統性を擁護しているのである。

## 2) 22節

—ὁ καὶ σφραγισάμενος ἡμᾶς

σφραγισάμενος は動詞 σφραγίζω のアオリスト分詞である。σφραγίζω の行為は所有権を印すた

めに証印を押すことであるが、法的な保護や保証のために行われ、同語源の名詞 σφραγίς は文書を法的に有効にする「証印」を意味し、オリエントおよびギリシャ世界において権威者によって広く使用された (cf. FITZER, 1971, p. 946)。

二世紀には σφραγίς が洗礼を指す言葉として広く使用されていた。『第二コリント書』1章21～22節が洗礼の典礼を背景とするものであるかどうかについては研究者の間で議論があり、様々な見解がある。洗礼についてのパウロの教えは、「一つの霊によって皆一つの体となるために洗礼を受けた (ἐν ἑνὶ πνεύματι ἡμεῖς πάντες εἰς ἓν σῶμα ἐβαπτίσθημεν)」(『第一コリント書』12章13節)とあり、洗礼が聖霊の内に行為され、聖霊の授与と洗礼には密接な関係があることを示唆する。Dölger は、二世紀の教父の文書の中に明らかであるように、σφραγίς を洗礼としている数多くの証拠を示し、『第二コリント書』1章21～22節は σφραγίς という語で洗礼を表す使用の起源であるとしている (cf. DÖLGER, 1911, p. 80)。Wendland および Beasley-Murray は1章21～22節が洗礼の典礼を背景としていると考える (cf. WENDLAND, 1976, p. 320; BEASLEY-MURRAY, 1962, pp. 171-177)。Beasley-Murray は「聖霊の証印」とは洗礼によって確実にされた聖霊の保持と同義であり、初期の教会においては聖霊によって証印を押されるとは、「キリストに属する者として刻印される」ことを意味するとしている (BEASLEY-MURRAY, 1962, p. 175)。Benoît はパウロにとって σφραγίς は洗礼と切り離されたものではなく、σφραγίς は洗礼の行為と共にあり、特に聖霊の賜物に強調点があるとしている (cf. BENOÎT, 1953, p. 107)。Hughes は『第二コリント書』1章21～22節の三つのアオリスト分詞が回心した人間の内に起こる聖霊の働きの異なる側面を指すのであると考えている (cf. HUGHES, 1992, pp. 43-45)。Bultmann は『第二コリント書』1章21～22節において、信仰者をキリストのうちに一致させる洗礼がパウロの念頭にあることは明白であるとするが、動詞 χρίω が洗礼における塗油の行為と関連付けられているとは考えていない (cf. BULTMANN, 1985, p. 43)。Schnackenburg は、キリスト者の「聖霊による塗油」は「証印」とも呼び得るし、また、「聖霊の手付」を受けることもとも言えると示唆するが、この箇所を秘跡の様々な行為と結びつけることは不必要であり、むしろ強調点は神の救いの恵みとしての聖霊の授与そのものであるとしている (cf. SCHNACKENBURG, 1964, pp. 90-91)。『第二コリント書』1章21～22節には、洗礼における聖霊の授与によるキリストの体への一致という考えが背景としてあるとしても、これらの節の前後の文脈を考慮すると、ここでは、パウロは洗礼に関する神学を展開することを目的としているのではなく、パウロが使徒としてキリストに似た者とされ、真正な使徒として神からの承認を聖霊によって受けていることを主張していると考えられる。パウロが σφραγισάμενος という分詞をどのような意図で用いているかを吟味するため、さらにこの動詞の様々な用法を考察してゆきたい。

新約聖書においては、σφραγίζω は15回、同語源の σφραγίς は16回、κατασφραγίζω は1回使わ



れている<sup>7)</sup>。聖パウロが動詞 σφραγίζω をどのような意味において本節で用いているのかを吟味するために、新約聖書の他の箇所でもどのようにこれらの語が使用されているかを考察してゆきたい。

『黙示録』におけるこれらの語の使用は22回とその頻度が際立っており、巻物の「封印」、あるいは、神の僕たちの額に神の「刻印を押す」などの意味で用いられている。

『第一コリント書』 9章2節では、コリントの教会の信徒達をパウロが使徒であることの「徴(σφραγίς)」であるとし、それは、彼らのキリスト者共同体としての存在が、彼らの内に行われたパウロの働きに依存しており、パウロのメッセージの真正性の外的な徴になっているからである (cf. HAYS, 1997, p. 149)。

『ローマ書』 4章11節においては、聖パウロはアブラハムの信仰によって義とされたことの証印としての割礼について σφραγίς を用いている。

『エフェソ書』の導入の祝福において、「約束された聖霊で証印を押された (ἐσφραγίσθητε τῷ πνεύματι τῆς ἐπαγγελίας τῷ ἁγίῳ)」(『エフェソ書』 1章13節) という表現で動詞 σφραγίζω が使われ、さらに、聖霊は「私たちの相続する約束されたものの手付 (ἀρραβών)」(『エフェソ書』 1章14節) であると説明される。著者は読者の救いが如何に成就されるかについて語っており、証印のメタファーは聖霊自身を意味し、それはキリスト者の存在を特徴付ける徴である (cf. SCHNACKENBURG, 1991, p. 65)。また、『エフェソ書』 1章13節において、聖霊の証印を押される前に福音の真理の言葉を聞いて信じたことが前提とされており、真理の言葉を聞くことと聖霊の証印とが密接に結びつけられている。

『エフェソ書』 4章30節においては、信じる者たちが贖いの日のために証印を押されるのは、聖霊によってなされることが、動詞 σφραγίζω を用いて語られている。

『第二テモテ書』 2章19節においては、神が据えられた礎に刻まれた「銘」の意味に使われている。

σφραγίζω とその同語源の語は広範囲の意味に使われているが、主に次の二つの意味を持つと考えられる。第一には、神がキリスト者を神に属するものとして徴付けて、神に属する者として信頼できる者であることを認証し、神からの保護を保証する。第二に、この行為はある型を刻印することを意味するが、このメタファーは神がキリスト者の上に何かを刻印することを示している。『第二コリント書』 3章18節には、信じる者が主の栄光を映し主の霊によって主と同じ姿へ変えられることが語られており、この手紙の文脈を考慮すると、信じる者の上に刻まれるのは主イエス・キリストの姿であると考えられる。本節では、σφραγίζω は神が使徒パウロを主イエスに似た者とする、イエス・キリストの性質を刻印する行為として用いられてい

<sup>7)</sup> σφραγίς: 『ローマ書』 4章11節、『第一コリント書』 9章2節、『第二テモテ』 2章19節、『黙示録』 5章1、2、5、9節、6章1、3、5、7、9、12節、7章2節、8章1節、9章4節、σφραγίζω: 『マタイ』 27章66節、『ヨハネ』 3章33節、6章27節、『ローマ書』 15章28節、『エフェソ書』 1章13節、4章30節、『黙示録』 7章3、4、5、8節、10章4節、20章3節、22章10節、κατασφραγίζω: 『黙示録』 5章1節。

ると考えられる (cf. STEGMAN, 2005, pp. 227-228)。『エフェソ書』 1章13節において考察したように、証印は聖霊によって押されているように、本節においては心に与えられる聖霊によって証印を押すと理解されうる。このように、聖パウロは動詞 σφραγίζω を用いて神がキリスト者に聖霊によって神の証印を押し、イエス・キリストの姿を刻印してキリストに属する者とし、神の保護と恵みを保証することを表現している。パウロは彼が「神に由来する純真と誠実 (ἐν ἀπλότητι καὶ εἰλικρινείᾳ τοῦ θεοῦ)」(『第二コリント書』 1章12節) によって行動してきたことを主張している。ἀπλότης は、「単純」「純真、真心」「物惜しみしないこと」(玉川、1978, p.39) などの意味をもつ。『第二コリント書』 1章18～20節において神の誠実と、神の約束がイエスの内に成就し、神の約束がイエスにおいて「然り」となったことが語られた。「純真、誠実」は、またイエスの性質でもあり、それは命の与え主としての神への徹底的な信頼の内に見られる (cf. STEGMAN, 2005, pp. 347-356)。パウロにイエスと同じ性質が刻印されたのは、聖霊の σφραγίς によって可能になったのであると言える。聖霊を通して行われるこの神の業が、パウロの宣教における言葉の誠実さの源である。イエスの内に成就した神の約束の「然り」、イエスの内に現れた神の真理がパウロにも刻印され、パウロの宣教の言葉が真理であること、また、彼の使徒としての真正性が神によって保証されるのである。

—καὶ δοὺς τὸν ἄρραβῶνα τοῦ πνεύματος ἐν ταῖς καρδίαις ἡμῶν.

τὸν ἄρραβῶνα τοῦ πνεύματος という表現は、τοῦ πνεύματος が同格の属格であり、聖霊という「手付 (ἄρραβών)」つまり、聖霊が ἄρραβών として機能することが意味されている。δοὺς は動詞 δίδωμι のアオリスト分詞であり、ここでは神が「与える」行為を表現する。『第一テサロニケ書』 4章8節、『第二コリント書』 5章5節、『ローマ書』 5章節においては、神からの聖霊の授与が動詞 δίδωμι を用いて表現されている。ἐν ταῖς καρδίαις ἡμῶν という表現によって、聖霊が心に与えられることが示されている。ἄρραβών は新約聖書の時代のギリシャの法律においては賃金を伴うサービスの提供や売買の契約において用いられた用語であり、当時メタファーとして用いられている例はない (cf. KERR, 1988, p. 92)。パウロが聖霊を ἄρραβών と同格にして表現しているのは、キリスト者が神に何かを売するという売買契約のような関係を神とキリスト者の関係に当てはめる目的ではなく、むしろパウロのメタファーの強調点は、神が聖霊を将来の完全な救いの保証として与えることである。また、パウロは「担保」という意味の ἐνέχυρον を使用せず、「手付金」の意味の ἄρραβών を用いることによって、売買において手付として支払うものと将来完全に支払うものは同じ質のものであることを示す。すでに与えたものは将来に与えると保証されている全体の一部分であり、さらに、初めに与えたものと将来において全体を与えるものとの内容が質的に同じものであるということを意味することができる (cf. LIGHTFOOT, 1895, p. 323)。将来に神から完全に受けるべきものが何であるかについては、パウロは本節では明らかに述べてはいないが、『第二コリント書』 5章1～5節において同様の表現 τὸν ἄρραβῶνα τοῦ πνεύματος を用いて、終末的現実、永遠の命について言及している。



パウロにとって、聖霊はこの世界においてすでに働いている、命を与える力であり<sup>8)</sup>、同時に、将来の約束された救いの完成を保証するのである。現在の聖霊の経験は将来の贖いを前もって味わうことである。ἀρραβώνを支払った契約者が将来に完全に支払うことを義務付けられているように、神は将来の救いの成就の手付として聖霊を与えたのであり、神は将来において完全な贖いを成就し、キリストに完全に一致させ、キリストの永遠の命に与らせることを、聖霊を心に与えることによって保証しているのである。

パウロの論理は次のようである。真実な方である神から、パウロは確かな保証である聖霊を与えられ、キリストに属する者としての証印を押され、キリストと同じ性質を刻印された。キリストは神のすべての約束の成就であり神の真実であり、パウロはキリストの福音を説教する使徒としてキリストと同じように信頼しうる者であるということを、聖霊の働きによって保証されているのである。このように、パウロはコリントの信徒達に、自身の使徒としての信頼性が、神の真実の表れであるキリストとの、神の聖霊の賜物による一致によって確かなものとなっていることを主張している。

#### 4. 神学的意義

統語論的構造分析により、文構造がABA' というBを中心とする対称的な構造をなし、Aではパウロとその協働者およびコリントの信徒達と、キリストとの神のイニシアティブによる関係に焦点があてられており、A'では神が心に聖霊を与え、聖霊を通じてキリスト者に証印を与える行為に焦点があてられていることを考察した。この構造の中に、神を中心として、キリストと聖霊が対称に配置されていること、また、四つの分詞は神のイニシアティブによる行為を示している。ここにパウロの三位一体的な神理解の視点が示されている。神とキリスト者の間の関係が、神、キリスト、霊という三位格との関係として描かれ、塗油や聖霊による証印は神の行為であり、パウロをもう一人のキリストとしてキリストとの一致を保証し、パウロの真正な使徒としての信頼性を保証する関係性を生む構造となっている。

このような文構造に見られる三位一体的な形式は一見、偶然的で意図的ではないようであるが、パウロの三位一体的な神理解の視点は彼の使徒としての正統性を証明する議論において本質的なものであり、単に偶然にこの形式が描写されているのではないといえる。

『第二コリント書』1章21～22節において、三位一体的な神格相互の関わりにおいて聖霊とキリストは神を中心として相互に強く関連させられている。神は聖霊を通してパウロ、彼の協働者、およびコリントの信徒達に働きかけ、彼らの心に聖霊を与えることによってキリストと強く一致させ、聖霊によって神の子イエス・キリストの性質を刻印し、神の終末的救いの完成を保証している。パウロおよびキリスト者は、この三位一体的な、神、キリストおよび聖霊との関係性の中に聖霊を通して招き入れられている。

<sup>8)</sup> 『第二コリント書』3章6節参照。

『第二コリント書』1章21～22節の直接の文脈である1章19節では「神の子」というタイトルがイエス・キリストについて使われており、神とキリストとの明らかな関係性を示している。キリストは神の子であり、ゆえに、神はイエスの父である。パウロは『第二コリント書』11章31節において神を「主イエスの父」とし、また、この神がパウロは偽りを言わない真実な使徒であると知っていることを描写している。

パウロは使徒としての自分の真正性を神の三位一体的な働きによるものとしている。つまり、父なる神の真実な神の子イエス・キリストのうちにその約束が成就したことで明らかになり<sup>9)</sup>、心の中に聖霊を与えられ、証印を押されることによってキリストと似た者となり、キリストが神の真実を表すようにパウロもキリストに一致して真実を語るのである。

パウロはこのように、神、キリスト、聖霊と自分自身、また、コリントの信徒達の関係性を明らかにして、共に聖霊によってキリストのうちに強く結ばれ、終末的な命を約束されており、キリストに似た者に変えられていく過程を説明して、使徒としての正統性を証明する中で、三位一体的な神と人間との関係性の思想を発展させたといえる。

## 5. おわりに

パウロは自身の使徒としての宣教の言葉の真実性、また使徒の真正性を弁護する説明を行う中で、「神」「キリスト」「聖霊」の交わりの中で信じる者がいかにその関係性の中に参与していくかという神学を発展させた。『第二コリント書』1章21～22節において、神を中心としてキリストと聖霊が対称をなすA B A' という文の構造で、三位が対等に置かれ、「神」「キリスト」「聖霊」は切り離し得ない存在として描写され、パウロの三位一体的神理解を表現するものとなっている。

表現面では、商業の中心都市であったコリントの信徒の理解を考慮して、売買契約に関する法律用語に関連する *βεβαιώω* や *ἀρραβών* などの語を用いて神が聖霊を通して行われるキリストにおける救いの業を説明していることを考察した。

パウロにとって、彼の使徒としての職務とキリスト者の共同体の存在は、自身を三位一体的な神として啓示する神に基礎を置いていた。聖霊はキリストによる終末的救いの完成の保証として描写されており、神は聖霊を通してキリストとキリスト者を一致させる主体である。

聖パウロは旅行予定の変更という話題の途中にこの神学的考察を挿入することによって、使徒としてキリストのうちに一致して真実を語る説教者としての彼の正統性を訴えたのである。その中で、三位一体的神理解を発展させ、『第二コリント書』1章21～22節は三位一体の教義以前のおぼろげな三位一体的神理解を示すこととなった。

<sup>9)</sup> 『第二コリント書』1章18～20節参照。

## 引用・参考文献

共同訳聖書実行委員会編

2004 『聖書 新共同訳（一旧約聖書続編つき）』 日本聖書協会

NESTLE, E. and ALAND, K. & B. (ed.)

2001 *Novum Testamentum Graece*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 8th print of 27th ed., 1st 1898.

FURNISH, V. P.

1984 *II Corinthians*, the Anchor Bible, vol. 32A, translated with Introduction, notes and commented, Garden City, New York: Doubleday.

玉川 直重

1977 『新約聖書ギリシャ語辞典』 キリスト新聞社

DEISSMANN, G. A.

1901 *Bible Studies: Contributions chiefly from papyri and inscriptions to the history of the language, the literature, and the religion of the Hellenistic Judaism and primitive Christianity*, Edinburgh: T. & T. Clark.

WENK, M.

2000 *Community-Forming Power: The Socio-Ethical Role of the Spirit in Luke-Acts*, Sheffield: Sheffield Academic Press.

MURPHY-O'CONNOR, J.

1991 *The Theology of the Second Letter to the Corinthians*, Cambridge, New York, Port Chester, Melbourne, Sydney: Cambridge University Press.

FITZER, G.

1971 "σφραγίς, σφραγίζω", in *The Theological Dictionary of the New Testament*, ed. Kittel, G., and Friedrich, G., Grand Rapids, MI: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, vol. 7, 943-58

DÖLGER, F. J.

1911 *Sphragis: Eine altchristliche Taufbezeichnung in ihren Beziehungen zur profanen und religiösen Kultur des Altertums*, Paderborn: Druck und Verlag von Ferdinand Schöningh.

WENDLAND, H. D.

1976 *La Lettere ai Corinti*, tr. FORZA, G., (original: *Die Briefe an die Korinther*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1968), Brescia: Paideia.

BEASLEY-MURRAY, G. R.

1962 *Baptism in the New Testament*, London: Macmillan.

BENOÎT, A.

1953 *Le Baptême Chrétien au Second Siècle : La théologie des Pères*, Paris: Presses Universitaires de France.

HUGHES, P. E.

1992 *Paul's Second Epistle to the Corinthians*, Grand Rapids: W. B. Eerdmans.

BULTMANN, R.

1985 *The Second Letter to the Corinthians*, tr. Harrisville, R. A., (original: *Der zweite Brief an die Korinther*, (ed.) DINKLER, E., Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht), Minneapolis: Augsburg Publishing House.

SCHNACKENBURG, R.

1964 *Baptism in the Thought of St. Paul: A Study in Pauline Theology*, tr. BEASLEY-MURRAY, G. R., Oxford: Basil Blackwell.

1991 *Ephesians: A Commentary*, tr. HERON, H., (original: *Der Brief an die Epheser. Evangelisch-katholischer kommentar zum Neuen Testament, Band X*, Köln: Benziger Verlag Zürich Einsiedeln), Edinburgh: T & T Clark.

HAYS, R. B.

1997 *First Corinthians*, Louisville: John Knox Press.

STEGMAN, T. D.,

2005 *The Character of Jesus: The Linchpin to Paul's Argument in 2 Corinthians*, AnBib 158, Rome: Pontifical Biblical Institute.

KERR, A. J.

1988 "APPABΩN", *Journal of Theological Studies* 39, 92-97.

LIGHTFOOT, J. B.

1895 *Notes on Epistles of St Paul from Unpublished Commentaries*, London: Macmillan.